

間テクスト性の冒険 安田百合絵

角川『短歌』の十二月号には「短歌の「読み」を考える」と題された、歌を読み鑑賞するという行為をめぐっての特集が組まれていた。それを読みながら改めて実感したのは、結局一首の歌をどれほど誠実に読むかということがもつとも大切なのだという、ごく当たり前の事実だった。特集中で中津昌子は、

・自転車に追い越されつつゆく夜道 灯りには後ろ姿がないね

大森静佳 「現代短歌」二〇一六・八

・音もなく道に降る雪眼窩とは神の親指の痕だというね

服部真里子 『行け広野へと』

などの歌をとりあげて、それらの歌の「ね」という呼びかけは「どこに向けられているのだろうか」という疑問を提示したうえで井辻朱美の論考を引きながら、「全体をかるく、あくまで押しつけてこない雰囲気」をこの「ね」のうちに読み取っている。先月佐藤佐太郎賞を受賞した大辻隆弘『近代短歌の範型』の諸論を魅力あるものにしてきたのも、こうした助詞や細かな修辭をすくい取る繊細なまなざしが歌を文字通り活かしていたからだだったのでないか。我が身を省みて「読みの読み」についての抽象的な議論に日頃いかに陥りがちであるか、改めて反省に誘われた。

歌の一字一句をおろそかにしない緻密で内省的な読みと同時に、ある種の間テクスト性、すなわち歌と歌を結び、また歌を文学的

な伝統や文脈の中に位置づける試みも、劣らず重要であろう。歌のうちに、それが明確にあらわされている場合もある。たとえば、

・しんしんと射精せしもの拭ひさる紙くづは毒蛾潰しかたち

吉田隼人 『忘却のための試論』

という一首は、森岡貞香の「生ける蛾をこめて捨てたる紙つぶて花の形に朝ひらきををり」という美しい歌を意図的に性的なコンテクストのうちに置き換えた、意図的な本歌取りである。また、

・呪ふべきいくたり在りてたましひのほの明かりせり ジルベルト・ド・サンルー 水原紫苑 『光儀』

という歌において水原は、ブルーストの『失われた時を求めて』のジルベルトを登場させている。父を裏切って自らの出自を隠し、スワンという姓も隠して「ド・サンルー」となった結婚後のジルベルト。その後ろ暗さが見事に表現されることで、歌は三十一字の制約をはるかに越え、一語一語が深い意味作用を帯びる。

ただ、こうした明示的な参照だけでなく、隠れた参照項を探し、更に作者自身も意図していなかったかもしれない文脈に歌を置きなおすことから、収穫が得られることはある。

・をさなごを胸にいだきて羞しげなる若かりし人の髪に光あり

横山未来子 『午後の蝶』

「写真には、一度と戻らない時が写しとられている。」という詞書とともに収められたこの歌を読むと、バルトの『明るい部屋』を思わずにはいられない。亡き母の幼い頃の写真を見つめるバルトの視線と横山の視線が一瞬交差し、それらの反響が忘れがたい余韻を残す。これは正確には妄想であり誤読かも知れないが、少なくともそこにはレクチュールの快楽と呼びうる豊かさがある。